

NPO法人 度島地区まちづくり運営協議会

《地元力》を高め、
自らの手で未来をつくる

集落支援員 森 健司



度島：平戸島最北端から約2.3kmの島。面積約3.47km²、周囲約12.0km、人口691人(令和元年8月1日現在)。江戸時代には多久島と称した。北西の海岸には標高40～60mの海食崖が発達、平戸島に臨む南側に農漁業を主とする3集落がある。旧石器・弥生時代の遺跡が出土、古墳もある。

拠点施設の建設とまちづくり計画の策定

平成二六年四月に、「ふれ愛センター度島」が竣工した。これまで公の施設は学校と診療所以外になく、住民票や納税証明などの簡単な書類は診療所の窓口で取得できた。しかし、診察で来ている人と一緒に並んで発行してもらおう必要があったし、診療所で発行できない証明書類については、平戸本島へフェリーで四五分、さらに平戸港から一〇分ほどかけて平戸市役所に行かなくてはならなかった。

このような状況下で、ふれ愛センターの建設はとても嬉しいニュースだった。同じ頃に議論の俎上にあがったのが、「まちづくり運営協議会」の設立である。平戸市コミュニティ推進モデル地域交付金を活用したまちづくり事業のなかで、市内の小学校区単位でそれぞれ協議会を設立する計

画で、その第一号として白羽の矢が立ったのが度島だった。平成二五年に度島地区まちづくり運営協議会を設立する

ための準備委員会が発足し、「まちづくり計画」の策定がなされた。計画策定で重視したのが、住民総参加ということ。できるかぎり住民の意見を聴きながら、「地域の課題は何か」「地域のお宝は何か」ということについても、住民が主体となってフールドワークやワー



住民が主体となって実施したワークショップ。

クシヨップを行ないまとめていった。

そして協議会の目標などについて議論を重ね、住民自身が今の度島状況をしっかりと見つめ、このままではどうなるかという「成り行きの未来」と、住民が度島を盛り上げていく「実現可能な未来」のイメージを共有し、まちづくり計画を策定していった。

当時、度島には公共交通機関がなかった。そこで、島内事情に合致したコミュニティバスの運行開始を第一目標に掲げ、島内の各種団体や市民公募で構成する度島地区まちづくり運営協議会が平成二五年に設立された。

まちづくり活動の開始と拠点施設の利用

協議会を設立した年は、主にまちづくりの準備と細かな計画策定にあたり、翌二六年から実質的な活動を開始した。協議会内には、生活環境部会、健康福祉部会、安心安全部会、地域づくり部会と四つの部会があり、その中で地域の美化活動、高齢者の脳トレ、シニアカー運転講習会、お帰りのなさいイルミネーションなどの事業を展開している。

特に毎年八月一〇日に開催されている、「たくしま夏祭り」は人口約七〇〇人の島でありながら、約二五〇人が集まる一大イベント。島に高校がないため中学卒業後は島を出る若者がほとんどで、働き盛りの二〇歳から六〇歳の男性はタンカーや貨物船などの内航船や巻網船に乗っており、普段は島にいないことを考えると、日常的に島にいる人口

は五〇〇人程度。じつに島の約半分の人が参加している計算になる。さらに、高齢者や寝たきりの人などを勧誘すれば、住民総参加と言っても差し支えはないだろう。

設立時の目標に掲げたコミュニティバスの運行についても、①住民の意見の集約、②バス運行ルート決定、③運賃の決定、④運転手の雇用（運転手の賃金の決定）、⑤陸運局などへの各種申請手続き、⑥法人格の取得、⑦試験運行、⑧運行開始というステ



大半の住民が参加する「たくしま夏祭り」。

ップを三カ月かけて踏み、実現に至った。また、バスの運行に必要な法人格は特定非営利活動法人が最も適していると考え、取得することになった。

本格的な活動には設立二年目から取り組みはじめた。これまで、まちづくりに関与することになった住民も少しずつ興味を



コミュニティバス「ふれ愛センター度島号」。

の勉強スペースとしては利用しづらくなっている状況がある。そのため、市に対してはさらなる活動スペースとして「ふれあい会館」の建設を要望している状況だ。

さらなるまちづくり活動の展開

設立三年目（平成二七年）になると、これまで発言しなかった人から活発な発言が聞かれるようになってきた。住民の意識が変化してきたと思うし、このままではいけないという危機感が出てきたものだと捉えている。

示すなど、まちづくり運営協議会の活動が浸透していった。また、住民の間で自主的に団体の結成が図られ、ふれ愛センターを拠点に繰り広げられる活動の幅が広がっていった。

現在は九団体が予約制でこの施設を利用しており、利用人数は年間延べ六〇〇〇人。施設の利用許容人数を超えており、新たに申し込む団体や、子どもたちの

一人の住民の声から事業がはじまることもある。具体的には、高齢になるとフェリーに乗って島外の床屋に通うのが難しくなるという相談があった。数年前まで島には床屋が一軒のみあったが、なくなってしまう、それ以来、住民は島外に通わなければならない状況が続いている。そこで誕生したのが、毎月一回（第二月曜日）、島外から理容師を招き開催する「月イチ床屋」である。最後まで床屋をしていたお宅から、椅子や道具を譲り受けることができ、使われなくなった建物の修理とペンキ塗りなどの作業を住民が進んで協力してく

れたことで会場の問題も解決。最初は文句を言っていた人も共同作業の過程で楽しさを発見し、最後は笑顔で作業を終えることができた。ここにはまちづくりでありがちな「やらされ感」はなかった。

さらに、これまでの四部会に加え、



島外に散髪に行くのが難しい高齢者のために理容師を招いて開催している月イチ床屋。

新たに産業育成部会を設けた。これは協議会の自主財源の獲得に向けた第一歩で、島の郷土料理を集めた品評会「タクシモンドセレクション」を開催し、当日は二〇〇人ほどが来場する賑わいとなった。度島の一大特産品をつくるべく、今も継続して取り組んでいる。

また、翌年に長崎で開催された「ねりんびック」にちなんだ、頭脳ゲーム「健康マージャン」大会も開催した。これまでは高齢者の脳トレ「たくしま大楽」などがあったものの、日中の行事には参加できない男性も多かった。昼間は畑などに行き、汗を流して体を動かさないと遊んでいると思われてしまうという風潮があったのだ。そこで、島の男性にも参加してもらいたいと計画されたのが、マージャン大会である。この大会はなかなか盛況だった。ほかに劇団の招へいや、月イチシリーズ第二弾となる「月イチ清掃」、島の集会場へのAED設置に伴う、救命救護訓練などさまざまな事業を展開した。

その中でも、特に刺激的だったのが日本離島センターの離島人材育成基金を活用した「度島まちづくり塾（たくしま塾）」である。

「度島まちづくり塾」の取り組み

島の高齢化率は約三六パーセント（令和元年七月現在）。少子高齢化が急激に進む末端の地域においては、

若年層の存在が重要になってきている。特に子どもは、地域にとって次世代の担い手であり、幼いころから地域と積極的に関わることで持続可能なまちづくりにつながることが期待されている。

次世代の人材育成のために開催した「度島まちづくり塾」は度島

中学校の生徒を対象に、まちづくりに対する発言の機会を設け、積極的に地域に興味を持ってもらうというもの。塾の目標は、中学生が自分たちのふるさとを知り、度島の未来を考え、みずからの手でつくり上げていくことである。また、島を自分たちで住みやすくして、島を離れたあとも将来帰ってきたいと思える場所にするのだ。

たくしま塾では、まちあるきやワークショップ



中学生たちは「たくしま塾」で議論を重ね、ふるさとの魅力を再認識する。



たくしま塾の「観光客あふれる事業」で島の魅力を伝える中学生。

ッブを通じ、自分の島を知ることからはじめる。島のお宝と課題を見つけ、そして、現状このままの「成り行きの未来」と自分たちが目指す「実現可能な未来」を考える。目指す未来にするためにはどうしたらいいか、手段と方法を考えて、事業計画に落とし込んでいく。

たくしま塾

の特筆すべきところは、協議会の設立時に大人たちが四苦八苦しながらやっていたことに、中学生の段階から取り組んでいることだろう。学校へ初めて話を持ちかけたとき、校長先生は度島のためになるのならば一緒にとおっしゃってくれ

た。教育現場からの協力が得られるこの環境も、お宝だったのだ。

中学生が見つけた課題は〈自然〉〈産業〉〈交流〉の大きく三つに分類でき、それぞれの解決策について議論をした。そこで出た意見には、例えば、〈自然〉草取り全国大会や度島クリーン大作戦の開催、〈産業〉度島ブランドスイカの復活、〈交流〉「度島に観光客呼びたい」「度島の海をまるまる水族館にしたい」といったものがあつた。

そして、最終的に意見を集約させ、「度島をもっと美しくする事業」「地産地消販売事業」「観光客あふれる事業」の三つの事業計画にまとめ、一冊の「まちづくり意見書」として大人たちに提案した。ここまですぐたくしま塾の一年目である。参加した中学生たちは、はじめは取り組み自体をあまり理解していなかったが、回数を重ねるごとに島の将来が自分たちに託されていることに気づき、ふるさと思ふ気持ちで改めて強くなっていったように感じた。

たくしま塾二年目は、前年度計画した三つの事業の中から、まず「観光客あふれる事業」に取り組んだ。具体的には島外から一〇家族四〇人を受け入れ、中学生が実際におもてなしを行ない島の魅力を伝えるというもの。これは、今後社会に出たときに初対面の人でも物怖じせず対応できる力を養う機会でもあった。彼ら自身も島の魅力を再認識し、地元への愛着がさらに深まったのではないだろうか。

三年目はトウモロコシを植えて、たくしま夏祭りで販売

する「地産地消販売事業」に取り組んだ。農業を通じて自然の偉大さを学び、商品販売の大変さも実感できたと思う。たくしま塾を始めた時の中学一年生が三年生になっており、下級生をリードし指導している光景も見られるなど、たくしま塾を続けることの大切さを感じた。

二五年後の未来に向けて高めたい「地元力」

「僕は二五年後はもっと店が増え、子どもや若い人たちがたくさんいる度島であってほしいです。また、海は今のようきれいで、観光地になっていたらいいなと思います」
たくしま塾で二五年後の度島に宛てた手紙にこんな言葉があった。地方でこんなことを言える中学生は貴重な存在ではないだろうか。

運営協議会では、まず「地元力」を高める事業の展開を心がけている。自分たちの島を、自分たちの手で守っていく。目を背けたことや、気づかないふりをしていればよかったこと。そんな島の課題を住民が再確認する。そして、一人でも多くの住民が島を愛し、島に住み続けたいと思えるようになることが一番の希望である。

たくしま塾では、戻ってきたいと思えるような島づくりに生徒自らが取り組む。二五年後、親となりUターンした生徒が自分の子どもと一緒に島のことを学ぶ。こんな風景をイメージして、日々活動に取り組んでいきたい。

一歩を踏み出すまではなかなか難しいが、一旦踏み出し

てしまえば二歩、三歩と続く。設立当初、「まちづくりをやつて度島の何になるんだ」と言っていた人が、「まちづくりはマグロだ。活動をやめたら死んでしまう」とまで言うようになった。私はまちづくりの活動にはゴールがないと思っている。また、一気に目に見える結果が出るわけでもない。先の発言は協議会が活動を続け、少しずつ度島が元気になっていると気づいていることの現れなのだろう。
まちづくりを考える時、視線はつねに未来を向いている。二五年後の度島をつくるのは、今の度島に暮らしている人。今の度島に関わりを持っている人。今の積み重ねが未来をつくる。度島地区まちづくり運営協議会は、そうした「今」を大切にしたい。



森 健司 (もり たけし)

昭和59年、平戸市度島生まれ。高校卒業後、國學院大學で神道を学びつつ、東京都亀戸天神にて神明奉仕に励む。平成26年の帰郷後は集落支援員として、地域のまちづくり活動に参加。特定非営利活動法人度島地区まちづくり運営協議会の事務局として、協議会の運営、まちづくり活動の計画から実践までを住民とともに進めている。また、仕事のかたわら度島神社の禰宜として、国指定重要無形民俗文化財の平戸神楽の習得にも励んでいる。

■